近世説美少年録 八編 五

へ13
3567
40

門 ベ13
號 3567
巻 40

新編五十音引 石童子訓巻之二十五

東都 曲亭主人口授編次

第五十五回

鏑箭の短刀暗に樅二郎と陷る
両箇の健宗血と對決場に戰ぐ

知説韓錦樅二郎は。次の日巳の左側に稍睡覚て。躰て里の浴室に赴き。浴を果て。かの来て晝飯を果す程に。押絵は昨宵の事の趣。彼大漢が伝つるよしを告て。くり返し短刀を見せまるるぞ。樅二郎訝しと。我は人に誂てかゝる物をかとゝ。然るとあらざる。昨宵ゆゑ。早く告ざるぞと叱るを。押絵いうち笑ひて。否。昨宵かゝる不祥の事。告て這短刀を見せまるるぞ。今告るかいとそよくもいはゝそ只水と木も。べばの甲斐なくそ。奴家が庵漏ゆゑ程なく身は既に晩滅て。雖呼とも覚められ。只得其處に蚊屋を無て。奴家は納戸に宿り侍る。這短刀のゆゑも奴家の心ゆ

早稲田大學図書館
昭 34.6.3 受
藏書

から。今朝も亦幾回欠呼覚しなりけるとも。心のうちにて方便にて覚めねば術なし。
なるぞと奴家が科ゆゑて。叱りのゆるかれと。鮮諭にそが程ゆ。樅二郎は遽しく立ち歩。
膳を退けて。金襴の嚢の長級を解回して。合半見れば思ふ通ぶ。九寸五
分の短刀にて。鞘児は白金の鏑箭くられば愕然と驚くまでゆ且怕れ且怪しでゆ儘
押繪の見せてらぬ。昨宵這短刀とそ来ぬる。何人ゆ狭ゆ。精しくぞ是這鞘
の鏑箭は。當領主の家の花號なれば鏑野殿の重寶なる狭ゆ。まで知るべくもなく。出處
不定の物なり。一雲時も留め置べからぬ我一旬は慎しまるべ。酒を過さるゆ昨
宵は時八ぞゆ強られて。憶ぞ酩酊をゆ。今朝も亦貪睡
くて。今は及びを。爭何せん。疾里長ゆ告知らぬ。領主ゆ訴禀んぬ。倘亦昨宵の
大漢ぞ。来るとあらば。誘べて留めて我還るを俟れ。とのたまふも。恥て衣裳を改
まれば。押繪ぞ採て指歩を。両刀腰ゆ帯做て。彼短刀を携へて遽しく出てゆくを。

目送る押繪も胸安らねばやよ。疾里長ゆ。
届く。亭午時候樅二郎は応とぞ。
二郎は是日里長許赴ぬ。面談せまく欲るゆ。折ら他ゆ宿所ゆ在ら。今朝新
部領へ赴ぬ。侯ぬ。とも。かさの程は。
長と將てまるらぬとも。鏑野殿ゆ這年来面識まてる我ゆ。身單えとも早
ぬを好とを。誰狭越訴とのべぬや。と母思べ。退ぬて。郡司の館を投てゆ。浅澤
隄の頭ゆ。前面より来ぬる緝捕の頭人是則別人ゆ。郡司ぶ家の權豪
ゆ。鬼莉苛三届梁ゆ。憶ぬ。彼一人を韓錦と見てゆ。彼逃ぬと
ゆ聲と。俱ゆ群立緝捕の雑兵は。詐ぶと呼ぶ。十ゆを打振ぬ。推
捕龍れば。樅二郎は。敬鳥ぬ。此も噪ぶ。何事ゆ。在下犯せる罪ゆ。
とらるぬも果ぞ。苛三届梁歩を近つぬ。向ひて。ぬを。韓錦和郎ぶ罪ゆ。

なりは我知る所ゆゑら孤ども疾召捕て参らとある。相公の御諚と美りて伏兵と倶しく来ふけるふ。はまぐ宿所へ届るふ及ぐ茲ゆて逢しは妙るかるふ。あらば公問廳へ参りそらそ。とらそぐせば。樅二郎冷笑ひて在下今身ゆ當て召捕る覚るー。反て訴禀まべた一美あり因て里長許赴ゆふ他へ今宿所ゆ在らは我のみ。るらとも参んとそのそ発て茲ゆて来ふけるる。卒の共伍ゆ。とのるせも果ぎ苛三の眼を睜り。聲苛立て。そも勿論のるるべー。卒疾ゆとのそぐーて。伏兵ゆ前後を守らもう俱しく公問廳へとくいそぐせける。この段の繪像は前巻五十四回の十六丁裏に載せる。看官宜く併せ考るべし。かくて鬼薊苛三は從ふ伏兵ゆと共伍ゆ韓錦樅二郎と郡司の館ゆ俱しく参る問注廳へと誘ふ。局の内間るければ樅二郎は訴りて。桟をかゆてあるけゆ程障子の内ゆ聲高く。るよ韓錦韓錦。と呼は正しく軌的ゆらんと思ゆ樅二郎は向と応て。桟を寄まくあるけるふ。局の内ゆ布儲る。沙礫の中ゆ鈎索あり。憶ゆを

脚を勝まて忽地撞と顛び。ゆ鬼薊ゆ伏兵ゆさらに。亜る莫の蔭より。ゆ伏設ける雑兵ゆ。吐と嘘ゆて幾名欲走ゆ。折柴して起んと掙れば樅二郎のると捉へ脚を押へ。素を掛すくあるけるふ樅二郎は猶寄立ども。臥々ゆ脚を掙らまて。一雲妻時は挑まなりけれども。其頭ゆ准備あるりける。九尺階子を投掛らまく。壁木ゆ掛て動されば力及ゆ。結加れけり。あるとも樅二郎は軍怨ゆ堪ざれば。連ふ罵狂ひ。と苛三ゆ猶怕れて幾十行る柱を掛て伏兵ゆ守らもう韓錦の轉び。時捨たる短刀を。食る揚く。彼ゆ帯る両刀と俱ゆ廳の檐廊へ並置へ意氣揚々と。豫仰付れる。盗児韓錦樅二郎を捕ゆ。あり。人々禀ーと。聲高やゆ喚ゆけり。登時有司ゆ。るるて。ゆと角く障子の内へと見まば廳の上坐ゆ鏑野郡司紀軌的ゆ。縹紬ゆ家の花號深。做ーた。信濃織る麻衣ゆ長袴と穿下ゆ。小刀を腰ゆ帯てるふ中啓の扇子と

採りて立ち寄と引寄せ端然と坐したりけり左右に従ふ有司の每鍼持隈八刺高き首を老うるあり弱き者あり開き中に隈八る額と衝身と起きて彼短刀と拿抗て主君に呈覧あらくけれ軍的やとら受合く嚢と解せく見る程に苛立ち遽しく檐廊に升来て主君に告稟もらく郷高に御意と兼まりて臣名伙兵を従へて盗児樅二郎を捕捕んと他の宿所に赴く程に れよく途にて行逢ひ見る彼奴が窩合なる鏑前の短刀と懐中に秘れば捕まく思ひかども彼奴ともうえる猛者と捕逃をなりたりと思ひかへあく果立ちそぶ儘俱にそかうる局の内へ誑引入れカと勁きて。鎖召捕てはと言誘貌に呼え上るべ縄合の伙兵ども樅二郎と牽立く。檐の下に推居ける軍的是とうち呼て案と極遣らく。樅二郎と疾視て盗見思知るや。這鏑前の短刀い千金も換がぬ我家の什物なる郷高に

介に来給ひ紛失して久しく探れども有ることなりけれ。原来窩る者あり けんと思ひとりて堪能る周匝者流に占問ひ表に正可に伝が所為なりと報ふよりて訝とるぐる人いうち見ふよりる者に現然るもありけれ欲と人もいへば苛立ちふ課せくその身を召捕せふ果して這短刀と懐ふ者とうべ問いでも知るに窩盗の罪科左ても右ても逃る方る。速に首伏せ呵責れ合と實べ。早くいぞやいふぞと敦圉猛く譴問ふを樅二郎は怕るる色なく聲高やふ答るやう。そは宣ふとるぐら然る誣を誰かは羨んその故は如此如此の箇様々のことひとそ。昨宵樅二郎が家に在らざり一時見も知らず大漢件の短刀とりて来ひけるその事の首より女弟押絵が告ける趣樅二郎は帰宅の後稍ぞ知なる顛末と具に陳て又のやう。小可事の怪を知らざるふあらねども今朝は宿酒の醒ありて遅く起出るりければ告訴延引せりもから然ればとそうち

も図ぞ。今日も午の貝吹時候件の短刀を携て里長許赴くに他も亦外に出て在宿せぞと妙えーかぶ時の後れんとの惜くそ身軍とも御館へまゐるそ訴訟さすく思ふ。急ぎて来る路の程淺澤隈の頭そ御家臣鬼薊生に逢ーより。事の茲に及べるを憶に我を悪む者不測の罪に陷さんとそ謀りたるもぞゆえと。らせも果ぞ軍的の眼を瞋ー聲苛立て。默れ盗児勇悍ーと世話も云い這奴が又ん照据を取られてせん方なきに見も知らぬ大漢ぞの短刀をもて来ぞと巧に頼陳るとも其大漢を生拘て共侶に奉ゆて来ぞ。孰欲実事と思んや。這奴緊く責懲さぞ。必招ーまぞ。苛立早く咎を中よと烈ーに下知に届梁ぞ。羨ゆねと応ぞ。檐廊より走下て伏兵に下知を傳へて韓錦を推伏て咎を中すく去れども。樅二郎が身を反ーて敢其杖を受ぞ連りに寃を叫ぶの事果べくもあらざれば隈八も見るに堪ぞ請ぞ苛ーく下立て苛立と共侶に伏兵もと

罵将ぞ。稍樅二郎を推伏させて中る咎に先度の怨彼坐角力の恥辱と今怨をぞとのるに烈ーに呵責に幾百杖数も涯も那麻與美の院の月の續くまで透もあらぜぞ撻せーかぶ憐むべ樅二郎の皮破れ鮮血流れて息絶えとまてければ範的に咎を休めさぞ。其奴素より強情ゆえに早に首伏ぞ。異日又復拷問せえぞ尽獄舎に係ぐべ。とのに苛立張八を応とまて伏兵に下知と傳へく樅二郎に水を飲せるどせーかぶ姑且て樅二郎が我に復りて嗟嘆に堪ぞ。苛立に見かりて若們に是斗肖の小人ぞかいあるぞに不測の罪に陷ぞ者を誣く不測の罪に陷ぞ者。和漢今昔勘らぞ彼文王の美里に囚と孔子に陳蔡に苦ーめらる遮莫盗賊の悪名に負せらまーとのとを少ぞ我ら是清白の勇士に一日も元と喪ふとを忘れぞ。今這呵責の苦痛に怕れく知らざるとをありとー言んや。只寃に死んのぞ咎を止やる猶撻ぞやとのそうもを

昔三笑ふ性能しく這奴執ゐ浮されけ疾牽立よ。といそがせば伏兵多ら
阿と忘てゐるゞと角ふ樅二郎と辛くして推立て前後左右をうち守りくゆう
多く獄舎へ將ゝ去けり。尓る程ふ樅二郎い寃屈の厄ふ囚まて是より單獄金ふ
居り。かくべーとい豫より人ちゆ知るや白真弓張緊し心弛をてや背ふ受くる杖瘡
常晩甚しく痛ゆ。心地死ぬべく覚しかゞ忽地ふ思ふ曩ふ我仙丹と大江峯
張ふ乞ふーとる外ふ出る折ゐ貝ふ移して髪の裡ふ斂めとり然るを今ヨ寃の咎ふ酷
く梗ーとー折ゆ猶幸ふーて髪ゐ断離ぎーて故の儘るまゞ彼仙丹い必あらん。
今倘是を用ひまゞ孰の時と俟んや。と肚ふ問肚ふ合く。躯て頭髪の裏を探ふ
果して彼貝ふーかゞらち戴ふて蓋を所ふて掻をて聊嘗試るふ心地立的ふ清
爽ふるゆく程ふ氣力も倶ふ本復して背の疼痛も覚ぎるゆ這仙丹の即效
神妙。今さら驚く可れば且歎ひ且感嘆して猶其半分を嘗へ無く唾吸

めて鮮寛めく。指ふ染て背の痍ふ届限り幾番塗ら者半痂計指
の届ゆ處へ藥汁ゐのぐら流伝をて療治ふ隈やるりけ其杖瘡一夜の間ふ
餘波もあらず皆愈て痕ぐふ見らぎるふけ。かるべーとい知りもけれ軌的ゐ
その次の日ふ苛三笑を召よをて韓錦奴いふるりけ公合の苦痛ふ堪ぎーて昨宵
死ふなるゆであらんぎらん。とふを苛三ゆあへぎ本今朝ゆて見ひーふ樅二郎い故の儘
ゆく。氣力毫も衰へず。杖瘡い皆愈て痕ぐふあらぎるひぬ怪有るるふれい
ぎや。と告るふれ軌的呆果く。そゝ訝しーるふこと。我みづから撿をへ。疾牽生せ
といそゞ苛三い再説ふ及ぶ。躯て獄卒ふ下知を伝へて樅二郎ふ祖せ且
重索と堅糸ちく掛く局の内ふ牽入まゞ軌的い廳の檐廊ふ立て孰く
是と相ふ果して苛三ゞ告ーふ違ぎ樅二郎い爽然たる面色生平ふ異るゝを
杖瘡もゆゝとるけまゞ郡司主僕と罵るゝ威勢らく猛かりれば軌的直と

呆惑ふく。是日ハ笞の数を増て殊ふ緊く撻せしかども。樅二郎ハ今日牽生さる時悄地ふ仙丹を背ふ塗まそ。口中ふも哺ミしかば笞を受ても疼痛を覺ぜ。皮肉の破るるもなけれ只ハ只。寃を叫ぶのミ。呵責ゑの甲斐あるとなけれ共。三ら[illegible]ふ[illegible]ら[illegible]ハ軌的ハ又せん術を知らぎ。這奴于吉左慈の如き妙なる幻術ある者ハ倘秘ぜ走らせるべきハ大事なるべしと。是より後ハ拷問せぎ二重牢ふ龍在らせく。駿者ふ課せて獄勝の秘符を獄門ふ貼せるごとく由縁式者の願ふも。飯と獄舎へ餓ることと。饒さぎ只獄卒の数を増て夜と為く日と為く守らせしが。樅二郎ハ幸ひふ呵責の笞を逸れて安全として日を送りけり。休題是時韓錦の寤所ふ昨日樅二郎が彼短刀を携て里長へそ出ーとる。人ーなるもでかの来ざれば押絵ハ單胸安ふ思ふく。侯程ふ長ハ夏の日敬ぜ下哺ふなりー時候。外面ふ跫然と脚音ふ[illegible]ハ時ハと奈我四郎とふ連立て走の

来る。押絵と片隅ふ招ぎ寄せ。樅二郎が禁獄せる孔。事の趣云云と左程咤ーとそ告ーかば押絵ハ驚ハ且憂ひて。原来彼短刀の祟ふ[illegible]ふ[illegible]ハ其故ハ箇様箇様如此々々のなりけりとそ。昨宵一箇の大漢が彼短刀とのそ来ふけるその事の始より。郷尚ふ樅二郎ハ件の義を里長ふ告て訴禀んとそ彼短刀と携乃て出て去けるとまそその詞急迫く説示せば時ハと奈我四郎ハ呀て嗟嘆あるのミ。計の出る所を知らぎ。當下押絵ハ又の為ふ打歎く大江主僕ハ防守吏ぎと共侶ふ妙義へと立去りのち。仲兄を[illegible]さへまぎかの来ざれば。何せん術も奴家が身單智計を借るべき所由もなし。怎いふ[illegible]ふ困ーて額を病ぎれば時ハと奈我四郎ハ憶ぎ膝と打鳴らして。[illegible]ふ思合ぎれば我師を怨る者あるて。謀りて罪ふ陥んとて彼禍害と責くるるらんとハ思へども我ハ世話ふ[illegible]下司の計ぎ非如一年三ハ四月考なりとも休ふ似れば長詮説ーてあらんとハ重作哥々を呼かへらーて。

のうまと
とる人
ざる兵
ゑ八

健宗落魂て
のうまと
途ふ範的ふ
訴ふ
とけゆれ

商量するもあくとあらば然れば汝我們両箇が俱ふ妙義へ行くるらべ留守は安危も心許なし。奈我四郎どもや我やくべ秋とらん時分を推禁めて奈我四郎どの留守ふ否妙義へ我ゆえて時八和ぬ一八里長刀祢と商量を整へて明日より獄舎へ飯を餽る准備とを緊要ならめ。今日八既ふ暮るふ近ろ。咱等八明日未明より畢妙義へ赴くて八重作哥々を相俱して大後日八必ずの来べ。妖々八今より消息を書写めて渡しの八咱等八宿所へ走りかりて。黙燭時候ふ又来てんいでくとのいつも身を起さまくもする程ふ里長八四隣なる屋主等を相伴ふて。呼門高く訪来る。躯て母屋ふ升りて押絵等ふ向ひてらるる。韓錦主の不慮の災難這里へも早く伝へらん。衢ふ御領主様よりあん下知あり。咱等と故老達を召よせさるる。則仰渡さるる。

縦二郎の罪如此々々なれば目今禁獄なるる他が贓罪軽るなれば由縁の者よ願ふとも飯を獄舎へ餽るとを饒さず。縦二郎が宿所とバ五保等迭代ふ日夜守るべ。縦二郎の弟八重作。四五日旅ふ在りと狡いへバ帰宅の日ふ訟亶し。私その餘同宿の男女あらば留めて一箇も散さべるな。其の義を伝と守らわ。捷させるひふ因て今来る時這人々ゆも商量をする女流一箇の宿れ。男子夜番八憚りあり。夜分八家々衆をおとをべ。ふまでゆあら私ども時八奈我四相貧で八重作哥々を呼かへも脚力といそぎねといへば四隣の亭主等も共ふ口諾と答応て又出直して歩べしと。斉一立バ里長も共侶ふと退のけり。是より後八韓錦の武芸角觝の弟子等訪て来る甲夜過るまで混雑涯なるける。浩りし程ふ鶴脛奈我四郎。当晩押絵ふ消息を受合て宿所ふ退りて遽しく。扮装を整てその詰朝未明より。妙義を投て立出けり。案下再説。分る程ふ假健宗小雪太八。昌裏ふ軌的ふ薦める。彼奸計行れて剛勇なる縦二郎八。脆く獄舎ふ保れしより。是を一箇の功ふして盤纏をとらべやと思ひて。大刀自ふも軌的ふも。又武者修行の

願ひとらひ出で。路費一百両と乞ふのから。主人母子ハ諾ひも。俱ふ禁ることゝ前の如く放遣べくもあらざれば。小雪太いひく困じ。その上ハ是非ふ及ばず。折と覘ひ有財を窃盗合ひく走らばやと腹ふ寄思とき為のこ。ふ便とゆるゞうけ。人の睹慾の同じかねど不義の情願相似る。鏑野郡司軌的ハいぬる日盗児十六郎ふ機密と課ふ。彼短刀の一條ハ。立地ふ事成く憎しと思ふ樅二郎と。輒く陷れ。こゝ。その餘のゆいらまぐ。ゆえ。日屬思忘ま。少女援ふいふ。ふりけ十六郎ハ。まゞ。その便とを。ゆるむや。今日まで。も信ふ。ハ。他力及ばずとく。逃て他郷へ走り〜ふわらむ。這里ゆ。ものを思ハんより。我みづから立出く。巷街の風聞とも。捞るべく。援ふの所在を穿鑿ばやと。尋思とき。る其次の日ふ馬上優ふ打扮て。鍼持隈八刺高と。腹心の若黨二四名と。雑兵奴隷を従へて。昼月雨霽一亭午の時候部領の里と東西とゆくうち。巡り。檢儘ふ。潛行の編ふ。深く思ひ。人知

らぬ。沢澤隈を過る程ふ。沼の水際の。蓼子花。時知り。貌ふ。咲。ゆ。その。愚ふ。朱。とも。人等可の長視ふ。ゆ。れば。軌的ハ。雪時。馬と駐めて。水と飼せ。ふ。這。塘隈ふ。松。蔭。より。忽。馬。と。て。一。個。の。乞。児。ふ。く。馬。前ふ。跪。て。禀。上。ば。事。ゆ。へ。ハ。ゆ。で。聞。召。れ。よ。ふ。訝。る。軌的主僕ハ。ふ。何事。ぞ。とだ。ふ。齊一。仕。と。見。れ。ば。十六七歳。る。少年。ゆく。海松の如ふ。乱。る。額髪の。鼻。まで。垂。て。搔。抗。る。隨ふ。又。よく。見。ば。日黑。たる。面貌。克。悪の。者ふ。似て。身ふ。ハ。榜の。破。れ。る。汗。衫の。外ふ。被物。る。く。縄。とゆく。帶。と。ふ。沙。柄。杓。を。腰ふ。ま。て。蜈。蚣。の。像。く。ふ。穿。敗。た。る。草。鞋。の。底。拔。て。身ふ。引。添。る。菅。笠。立。風。の。芭。蕉。紙。蟻。圃。ふ。似。る。ふ。世。に。剣。ハ。袴。と。唱。ふ。め。る。伊。勢。皇。大。神。宮。の。大。麻。と。挿。夾。て。背ふ。稾。色。と。馳。る。る。實。ふ。怪。し。て。訴。人。ふ。ゆ。れ。ば。軌的。馬。の。鑣。面。と。脆。て。其。方。へ。推。向。て。刺。高。仔。細。と。詰。と。下。知。ふ。従。ふ。鍼。持。隈。八。找。出。く。件。の。乞。児。ふ。打。向。仕。と。睨。て。你。ハ。原

是那里の者ぞ何ゆゑの故に膽太くも守に直訴仕るや願あらバ疾く言せよと宣ふに
児ハ羞ろ色もなく頓やく頭して答るやう。然ン候今ハ何をか名告言ん面伏なれども
小可ハ近江なる觀音寺殿の權臣なりける曽根見五郎平宗重の弟なる曽根見
伍六郎健宗是なり鍋野殿の為にハ從母兄弟なるものから路遠けれバ一度も
見参せざれども我名ぞらハ知れつらん然るを斯窶果て當所に呻吟來りける原是
仔細あることにて吾身に覺縁禍鬼の祟りせん方なければ其義を始より
告まうさんハ言のよそくて一朝に聲しがたけれバ御館へ倶し給ひ肝胆を吐て秘密を
明して疑ひを解べしらでと。廣幾ふを乾的ハ冷笑ひて噫息最鈍ぞ進元
見ぬる刺高るも知る如くその伍六健宗ハ一日既に我館に來て今も猶宿所に
在り離寛病ならざる者何ぞ両箇の健宗あらんや贋物なると知るべし元のことハ
乞児なうち坐て又隈八に打向ひ今の御詮ハ定ぞ左ぞが世に同姓同名の者。

これらにあらねども觀音寺の城内にて曽根見伍六健宗と喚れしハ我外に亦ある
るべくもあらず然るを名を竊み主を欺きて御庇に寓まく欲するハ狐狸の所為なる
狡猾さ其我上を知りたる者栄利の為に先ぞして謀りて紛来ぬらん所詮其
奴と對決させて聽せなバ立地に玉石分明ならんのミとぞいひも果ず乾的ハ眼睜
瞪り聲荒立て弁る勿論のことかハ刺高其奴に腰纏搠て牽のて來よといふ
がにそが儘馬と騎かへせバ隈八ハ雑兵等に下知を傳て健宗の腰に搠る縄補索
端を緊て情なく牽せて倶に從ひけり恁而郡司乾的ハ是日宿所にかへると驪て
先毋の大刀自にありける今日の奇事を箇様ゝゝと唄告てそくく衣裳を改めつゝ
有司二三名を從へて大く河注廳へ出る程に鍼持隈八刺高ハ雑兵等と共侶に
腰纏搠たる乞児健宗を局の内へ牽入れて檐廊近く推居てる當下乾的の佗
と見て。あゝそれ乞児頭を擡よ汝でも知るべきとはやら我母刀自の住る觀音寺の

伍六健宗に曩に訪ひて我家に在り。然るに伍も伍六郎健宗と名告れども正しく照据あることなり。且前に来たる健宗は其女兄窓井の消息あり。并び齎したる鏑丸前の短刀なり。況實の健宗なる者其身不測の罪ありて近江を追放せられしなれども乞児に成る迄零落して這頭を徘徊せざるもあらじ。縱令呻吟来りしとも我家を訪はせじ。我外に出るを覗ふて中途に愁訴あるべし。祢と云恰と云疑ふべく信ぜべらべ浅ぬ伎倆の顛末を招ぎ致せ甚麽ぞと聲高やかに詰れども健宗阿容たる色もなく。開き宣ふと雖ども相公は只其一を知りて其二を知らざるの趣に目今宣ふ吉凶の趣ふりて。咱等は既に暁ぬ。その健宗と偽名告て御館に逗留する者は我兄五郎平宗丟の故の鞋奴小雪太と唱ふたる悪物にこそあれ。その故に箇様々々如此如此の支ひとそ。今茲四月下浣健宗死罪を宥免られて近江を追放せられ折女兄窓井の密使とて。衣裳短刀金二百両と小母御前へ寄せたる消息一

封を贈られしを。是に依て健宗は這地を投て来る程に召倶したる鞋奴小雪太に哄誘されて。美濃の野上に杖を駐め。色に迷ひ酒に浮れて逗留したれば。程有て宵件の小雪太は健宗が酔臥するを覗ふて且その衣裳両刀と盤纏の九十餘金を盜み。女兄窓井の消息を藏めたる鼻紙嚢に至るまで掠奪りて。逐電したるその夜の顛末を陳べて亦いふやう。彼時右の造代れば跡に残る我身の。土妓娼婦の洞房錢を逆旅主人に債られてはらはせん術あることなれば身に着たる夾衣帶も汗衫も剥奪られて赤裸にされて追出されたる其折の朽惜しさ又なべくも。浩る打ても避近に祐る神のあれば。件の客店に老母あり。絶に他が好意を。その敗れる袴の汗衫を被よとて悄地に艱しかべ。僅に肌膚を掩ふのみ。是より後の里人の門に立て糧を乞ひ路に客の袖に携りて一錢の施を乞へども艱るに最稀にて。邪慳の杖に追拂ふ書へ嘆て路に喀泣夜に亦露宿と常に日生と戴く

草に臥し露にそぼち雨に濡て逆旅に苦しき日を送る艱難譬ふ物もなく本月の初旬に當所に辿り来ぬれども今さらかゝる身のざまを御館へ推参せべくもあらねば部領の里に又日を送りて悄地に便宜を俟けるに今日も相公の潛行の風聞早くゆゑ〻なべ是なるべしと思ひ身の浅ましき浅澤のつみかねゝる一期の苦辛恥を忍びて御馬丞司に愁訴の本意を遂んとれども女兄窓井のおとゝる彼短刀さへ消息さへ小雪太奴に密竊去られぬ正に照据あることなれば推て見参まるとも疑ることなかるべし〻と思ひ難て迷ひたの是を察し給へかと喞言がましく陳ずれば軽的笑ひて乞児俗の陳ずる所なもあり必べく空れども機変に闌て詭譎に巧に倣ふ者世に多し今一次の照据もなきに其所と實と偽と漫に真偽を執失んや寧真の健宗を呼出して目に物見せんその折言と易るなといはんそ健宗亳も擬議せず開き希ふ所大早く對決せ給へ

とゝ合る間に軽的一笛の有司を見返りて健宗召とゝ出べ阿とゝ立ひけり然る程に假健宗小雪太の武者修行に假托て大刀自に軽的に盤纏の百金を強ひ奪けるに其言聴るべくもあらざれば其の上の是非に及ぶ王人母子の戒借く納戸金を密竊に走るに不如と思ひ悄地に便宜を覘ふ程に是日軽的市中検臨見の為に従者多く従へて既に出ぬれば宿所に在られ大刀自の午睡に四下に人のなきを見すまして小雪太に打を入れ躯て納戸に潜入りて小箱に司に藏る金五十両を竊盗りて懐に聚と炎め已に子舎に退く肚裏に思ふ這金を多く足らねども多く貪に破敗の基なれば今宵這頭に火を放て事の紛れに脱去らばやと單計較程もなく軽的有司を使として問注聴へとて召せられば小雪太に詐て推辭べに中刀を腰に帯び脇刀を引提て来ぬ軽的に是べくと躯て側に招寄て却に咲ふ御高に市中を巡覧をせるに

淺澤隄の頭を一箇の少年乞兒あり他みづから近江る曾根見伍六郎健宗と名告て愁訴あるよ一れども其為体怪しければ腰纏と撰させて牽せて方僅かの束つ既に敗ゝく詢問あけふ隨即他ぶ陳ずる所固様々ゝ之尾ハ又如此々々ゝ有徒が真偽惑乱と我疑ひと解ふ由るゝ和殿彼奴を知りたる歟と問れて小雪太吐嗟とむるふ胸ふ鍼刺心地されども毫も色ふ見ハ呵々と冷笑ひ其奴ハ量義ふ美濃路まで我召俱ーなる鞋奴小雪太と呼做る奴ゝ他も觀音寺の城門ふ在ゝ時我兄宗玄の縁坐を受ゝ獄舍ふ繫れて俱ふ追放せられかべ咱ゝ佛心とりて艱苦の中ふ召俱ーて美濃路まで来ふけるゝ彼奴ハ恩と仇ふ為ゝ我盤纏と竊合りて逐電あり然れども天罰ふ乞兒ふ落て這頭へ呻吟ふける儘ふ我身ハ相公の御庇ふ依ゝ少知りて歟知らざる歟ゝ左まれ右もれ咱ゝハ女兄の自筆の消息彼短刀さへ齎ーなきハ問

でも真偽ハ紛明るふ人迷ゝふ我名と竊ゝそ又仇せまく欲るふ憎むべく畢竟狂人の沙汰ふれば取るふ足らざるふ尊公御意ふ懸られそと誠ふ説誇れ的ゝ點頭ふる趣寔ふ故ふ然らば目今對決ーて人の惑ひと解ふかし卒らくとふそぜハ小雪太ハ已とそふ柔らかふと応て刀を引提て徐ふ聽の檐廊ふ出て健宗と佐と見て這悪僕ふ膽太ー我ふ對ひて猶佯るやとふ為せる果ふ健宗ハ眼と瞋ー歯と切りて類稀る賊僕小雪太你ハ美濃の野上を我を裸體ふ做まそふ物皆竊ゝそ逐電あるふ飽ぎ猶且我名と竊ゝそ早先立て繇来て小母御前親子と惑ーて悄地ふ栄利を謀るとも我出来れば脱る路なし你ゝ之の照据ふ為る我女兄の消息と彼短刀ハ美濃路を你ゝ竊ゝ物るふ這頭ふ知る人あるとふれば我をさ誣まくるやとふ為ふ果ふ小雪太ハ呵ゝと冷笑て默れ悪僕舌長ー炭とりて雪と做とも我ハ汗の證据あり你ハ盲目の登居

誰佯と知るべきのことにへば健宗聲高ふ證據ふ偽り竊たる彼短刀と消息
ありとふ小雪太推禁めて我齎したる彼二種の偽證據ふるべきや烏滸なる言と打
笑へば健宗いよ〳〵性起て連りふ罵嗜るのを爭ひ果べもあらざれば鍼持隈八找出す雙
方を禁めそ分ち兩箇の健宗鎮りへ迭ふ虚実を爭ふとも彼身近江ふ在り時
よりその面影を認りたる者這頭ふ一人もあるとなければ鄙語ふ云水潑論を孰秋
よく是と辨せん縱照据いあらざるも文武の本事ならざやとられて健宗沈吟して助
言寔ふ其理あり開き目今思ひ出さり彼假健宗小雪太ふ素より是無筆ゆて
假名文ばふも讀とを要せず曾根見ふ觀音寺の權臣なりしふその弟なる健宗
が無筆なるべきもいかで今試ふ紙筆を授とを何れ書せのへられて小雪太驚とくて
是と偽ふ倣んや先我武藝を見知ぬ覺期とせよと敦圉猛く身を跳せく檐
廊より投るぶ像く飛下そ刀を拔て斫んとまるを健宗透さず身を反して鍔下楚と

合留て拇放さまくあそけば小雪太ふ合せて迭ふ角ふ邻舍ふ健宗が曄纏の
忽地弗と断離れば。健宗進退自由を得を捉る隨ふ毫も緩めず左の袖を掙
き眉間を礫と撲ーかば小雪太ふ呀とだらふ脆く刀を拇合れて又中刀を拔きくるる那
時遲ー這時速ー健宗ふ前聲をかけて振晃めを双の電光天ふ割覩面小雪太ふ首と
撲地と轉落されて軀も俱ふ仆まけり思ひ設ける光景ふ驚嘆喙ぐ隈八有司を彼
逃去ると雷散動めば俱ふ驚く雑兵毎群立蒐りて前後より悄健宗を組禁て
及ど大奪を生擒と押えを索と横ふけ當下範的怒りふ沿堪ぎ勃然る聲震立て
噫狠藉る鑑砭兒かな。對決いまぐ紛明るふ機ふ臨と刃を奪を叩ふ敵を
斫殺ふ贋物なると疑ひ。疾目前へ牽出ね我ばるるを撲ふーと死ーる健
宗の怨を雪んと早くせもや。と焦燥ける。打る部領の大刀自ふ件の兩箇の健宗の對決
のを云云と方僅人偽ふ攻ーより心許るを思ひ悄地ふ向注廳へ出く來る屏風の

大とり
有司
のりまと

真偽惑乱
健宗健宗と
有司
こまた八

蔭に躲ひて窺窺ゝと在りゝかば今範的の健宗を殺さんとて喚き怒
喚よせて聲を低めて却いまう。兄身にまぐ思ひぞ。彼ら児の進止武藝の本事さへ
あると思へば贋物とは定めがたし。倘真の健宗なれば戮して悔とも及んや。姑且獄舎に
繋ぎ置て近江へ使を遣しまして密かに就て健宗の相貌音聲身材まで詳に知ら
まほしべ。両箇の健宗孰か真孰か贋と紛明さん。惴るに要を支ふこと能はず。
範的にも領ぜず。奴々の教訓誠に小鬼薊苛三が隊の雑兵に飛禽疾四郎
稲妻女忠四郎と喚ぶ者あり。彼ら天神の使者ぞ。百里を一日に往還すと云
ふ。近江へ火急の脚刀の究竟の兵毎夜明日の未明に起ゐせん密かに遣を消
息とりの志のとこそ。大刀自に有理と応て躱く後堂へ退けば是より範
的に歩く隈八ら下知まう。我復思ふ。彼ら児奴を権且助けて後に亦
せん術あり。堅く〳〵獄舎に繋ぐべし。と云ふ隈八ら下知を雑兵ら伝へ
健宗を牽立させて獄舎へとそ遣りける。然る程に範的は鬼薊苛三を召よせて
近江へ火急の使の事如此〳〵と吩咐て却自餘の雑兵に假健宗の亡骸と見せ寺
へ送れとそ執斂めさせける。其亡骸の懐より圓金五十両出しかば範的又復訝りく
件の金を開ぶ儘に。ぶづら後堂へ出て母の大刀自に告げ。大刀自も亦驚怪
原来健宗武者修行の願稱ざるを怨む故に奴ら技を做したる狡他素より五十金の
貯蓄あるべきを躱く納婢に吩咐て財用算筭を用ゐ見るに納戸の小算
筭に納られる金五十両あらざるゝと大刀自も範的もとの愛敬失果て假健宗を
憎しと思へと無明の醉のまぐ醒果ねば。かつも真偽を定ゐ難し。近江より密井の回翰の
来ぬを俟ふ。ぶづらとそ儘に日を送りけり。畢竟樅二郎と伍六健宗と善悪邪正
異なれども其穴貍泥い相似る後の安危甚麽ぞや。開き下回に解分るを聴れか。

新局玉石童子訓巻之二十五終

新局玉石童子訓第五版畫工代稿筆工目次

繡像畫工　一陽齋後豊國

代稿　澤正次

淨書筆　畊谷金川

新局玉石童子訓第六版

第五十六回より第六十回まで五巻　推續近刊開板

本編第一集より先悪少年の列伝を著あて次ふ善少年の列伝ふ及べりまくとのそ大江峯振先世の段より第六版ふ至るまで悪少年晴賢の以後の稿案を忘れてふ似ろりさぐ部領の小結局稿ド果るふ及びて又朱之介晴賢の自後の話説ふ至らまくもたもたの次第六版を續出せと日ふ看官ゑべく彼汐く作者の用心を知らん

著作堂路孀代書

○家傳神女湯　婦人ちのみち　産病の妙薬　一包代百銅

○精製竒癒丸　大包代金二朱　中包代弐分五厘　小包代五厘　但ちくさろ不仕い

○熊膽黒丸子　ムまのあけを以丸ぜ　多くのくすをまりえる　一包代五分

○婦人の宝の妙薬　つぼ虫さらしんどうのこと　ア ふ用いてけっきりのこと　一包代六十四銅

製茶本家　四谷隱士　瀧澤氏

弘所　元飯田町中坂下南側中程　たゞ沢氏

繡像復讐石見英雄孫　全部五十冊

南海　玉藻主人　編輯

浪花　蕚亭歌川芳梅　畫

○初編　系図入作　二編　玉藻主人嗣著　三編　東陽子嗣著　第四輯以下作者一家

永禄天正の頃紀州名嶋の豪士岩見重太郎橘種季が生涯より武者修行せし間の義功大蛇の害を除き老狸の妖を殺めし勇威を称め後ま天の誅を蒙りし経歴　慶長成敗大川ホ三八の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し絶小室町殿ハ奉仕て任官し終ハ本主水正ま敵を打ち同じ言葉幸豪が女婿那波婦岩瀑孝女新尼ホ子ゑ終ハ黨の五雄と称する勇士の列伝霊猿悪魚の怪談ホ五輯より八益八佳境新話多り

浪花書肆　南久寶寺町心齋橋北ヘ入　伊丹屋善兵衛板